

春の夜

芥川龍之介

青空文庫

これは近頃Nさんと云う看護婦に聞いた話である。Nさんは中々利かぬ氣らしい。いつも乾いた唇のかけに鋭い犬歯の見える人である。

僕は当時僕の弟の転地先の宿屋の二階に大腸加答児を起して横になつていた。下痢は一週間たつてもとまる氣色は無い。そこで元來は弟のためにそこに来ていたNさんに厄介をかけることになつたのである。

ある五月雨のふり続いた午後、Nさんは雪平に粥を煮ながら、いかにも無造作にその話をした。

×

×

×

ある年の春、Nさんはある看護婦会から牛込の野田と云う家へ行くことになつた。野田と云う家には男主人はいない。切り髪にした女隠居が一人、嫁入り前の娘が一人、そのまた娘の弟が一人、——あとは女中のいるばかりである。Nさんはこの家へ行った時、何か妙に氣の滅入るのを感じた。それは一つには姉も弟も肺結核に罹つていたためであ

ろう。けれどもまた一つには四畳半の離れの抱えこんだ、飛び石一つ打つてない庭に木賊ばかり茂つていたためである。実際その夥しい木賊はNさんの言葉に従えば、「胡麻竹を打つた濡れ縁さえ突き上げるように」茂つていた。

女隠居は娘を雪さんと呼び、息子だけは清太郎と呼び捨てにしていた。雪さんは気の勝つた女だったと見え、熱の高低を計るのにさえ、Nさんの見たのでは承知せずに一々検温器を透かして見たそうである。清太郎は雪さんとは反対にNさんに世話を焼かせたことはない。何でも言うなりになるばかりか、Nさんにものを言う時には顔を赤めたりするくらいである。女隠居はこう云う清太郎よりも雪さんを大事にしていたらしい。その癖病気の重いのは雪さんよりもむしろ清太郎だった。

「あたしはそんな意気地なしに育てた覚えはないんだがね。」

女隠居は離れへ来る度に（清太郎は離れに床に就いていた。）いつもつけつけと口小言を言った。が、二十一になる清太郎は滅多に口答えもしたこともない。ただ仰向けになつたまま、たいていはじつと目を閉じている。そのまた顔も透きとおるように白い。Nさんは氷嚢を取り換えながら、時々その頬のあたりに庭一ぱいの木賊の影が映るよう感じたこと云うことである。

ある晩の十時前まえに、Nさんはこの家うちから二三町離れた、灯ひの多い町へ氷を買いに行つた。その帰りに人通りの少ない屋敷続きの登り坂へかかると、誰か一人ひとりぶらさがるように後ろからNさんに抱だきついたものがある。Nさんは勿論びつくりした。が、その上にも驚いたことには思わずたじたとなりながら、肩越しに相手をふり返ると、闇の中にもちらりと見えた顔が清太郎と少しも変らないことである。いや、変らないのは顔ばかりではない。五分刈ごぶがりに刈つた頭でも、紺飛白こんがすりらしい着物でも、ほとんど清太郎とそっくりである。しかしおとといも喀血かっけつした患者かんじやの清太郎が出て来るはずはない。況いわんやそんな真似まねをしたりするはずはない。

「姐ねえさん、お金をおくれよう。」

その少年はやはり抱だきついたまま、甘えるようにこう声をかけた。その声もまた不思議にも清太郎の声ではないかと思うくらいである。氣きじょう丈ようなNさんは左の手にすっかり相手の手を抑えながら、「何です、失礼な。あたしはこの屋敷のものですから、そんなことをおしなされると、門番の爺じいやさんと呼ばれますよ」と言った。

けれども相手は不あいかわらず相変「お金をおくれよう」を繰り返している。Nさんはじりじり引き戻されながら、もう一度この少年をふり返つた。今度もまた相手の目鼻立ちは確かに

「はにかみや」の清太郎である。Nさんは急に無気味になり、抑えていた手を緩めずに出るだけ大きい声を出した。

「爺やさん、来て下さい！」

相手はNさんの声と一しよに、抑えられていた手を振りもぎろうとした。同時にまたNさんも左の手を離れた。それから相手がよろよろする間に一生懸命に走り出した。

Nさんは息を切らせながら、（後になつて気がついて見ると、風呂敷に包んだ何斤かの氷をすっかり胸に当てていたそうである。）野田の家の玄関へ走りこんだ。家の中は勿論ひっそりしている。Nさんは茶の間へ顔を出しながら、夕刊をひろげていた女隠居にちよつと間の悪い思いをした。

「Nさん、あなた、どうなすつた？」

女隠居はNさんを見ると、ほとんど詰るようになんと言った。それは何もけたたましい足音に驚いたためばかりではない。実際またNさんは笑つてはいても、体の震えるのは止まらなかつたからである。

「いえ、今その坂へ来ると、いたずらをした人があつたものですから、……」

「あなたに？」

「ええ、後うしろからかじりついて、『姐ねえさん、お金をおくれよう』って言って、……」

「ああ、そう言えばこの界限かいがいには小堀こぼりとか云う不良少年があつてね、……」

すると次の間まから声をかけたのはやはり床とこについている雪さんである。しかもそれはNさんには勿論もちろん、女隠居にも意外いだつたらしい、妙めづに險けんのある言葉だつた。

「お母かあさま様、少し静しずかにして頂ちやうだい戴だい。」

Nさんはこう云う雪さんの言葉に軽い反感——と云うよりもむしろ侮蔑ごべつを感じながら、その機会まに茶の間まを立つて行つた。が、清太郎に似た不良少年の顔は未だいまに目の前に残つている。いや、不良少年の顔ではない。ただどこか輪郭りんかくのぼやけた清太郎自身の顔である。

五分ばかりたつた後のち、Nさんはまた濡れ縁ぬえんをまわり、離れへ氷ひょう囊のうを運んで行つた。

清太郎はそこにいないかも知れない、少くとも死んでいるのではないか？——そんな気もNさんにはしないではなかつた。が、離れへ行つて見ると、清太郎は薄暗い電燈したの下したに静かにひとり眠つている。顔もまた不あ相い変か透わきとおるように白い。ちやうど庭に一ぱいに伸びた木賊とくさの影かげの映うつつているように。

「氷囊をお取り換え致しましょう。」

Nさんはこう言いかけながら、後ろが気になってならなかった。

×

×

×

僕はこの話の終わった時、Nさんの顔を眺めたまま多少悪意のある言葉を出した。

「清太郎？——ですね。あなたはその人が好きだったんでしょ？」

「ええ、好きでございました。」

Nさんは僕の予想したよりも遥かにさっぱりと返事をした。

(大正十五年八月十二日)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年3月24日第1刷発行

1993（平成5）年2月25日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j:utyama

校正：かとうかおり

1999年2月1日公開

2004年3月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

春の夜

芥川龍之介

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>